

平成 30 年 5 月 15 日現在

機関番号：34304

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02494

研究課題名(和文) テクスト言語学の観点からのアスペクト中和現象に対する考察

研究課題名(英文) A study of the aspect neutralization from the point of view of text linguistics

研究代表者

北上 光志 (KITAJO, Mitsushi)

京都産業大学・外国語学部・教授

研究者番号：40234257

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の成果は二つある。まず、従来のアスペクト研究ではあまり注目されなかった分詞(完了体副動詞、不完了体形動詞)の中和現象と前景・後景との関係を新たな分析基準を提案して解明した。また、タイポロジーの観点から中和現象に現れる破格形と語彙的他動性との相関関係の意義を明らかにした。次に、従来のアスペクト研究では不十分だった通時的にみた動詞、分詞と前景・後景の関係を新たな分析基準を提案し、19世紀から20世紀の代表的な文学作品を用いて解明した。

研究成果の概要(英文)：This study has two purposes. 1) The first is to consider aspectual synonymous forms of Russian participle and converb and in literary texts from the point of view of "foreground vs. background" (which concerns e.g. the position of the direct speech construction) and to elucidate their typological significance. We propose the parameter which concerns with foreground (the direct speech construction) and consider a solecism of Russian participle and converb from the point of view of semantic transitivity, in revealing its typological novelty. 2) The second is to consider the functional differences between the Russian perfective - imperfective verbs and converbs from a diachronic point of view. We investigate them in terms of the parameters of "foreground vs. background" (which concerns e.g. the position of the direct speech construction).

研究分野：ロシア語学とテキスト言語学

キーワード：副動詞 形動詞 完了体 不完了体 前景 中和 破格 意味的他動性

1. 研究開始当初の背景

従来のロシア語動詞のアスペクト研究は、主として完了体(совершенный вид)と不完了体(несовершенный вид)を対置させることにより、それぞれの特徴を明らかにすることに終始する語彙分析がほとんどである。しかし、アスペクト概念の全体像を明らかにするには、単に完了体と不完了体を対比するだけでなく、これらの中和現象にも目を向ける必要がある。運用上、文意を変えずに、2つのアスペクト形式(完了体と不完了体)の選択が揺れるケース、あるいは、一方のアスペクト形式(完了体あるいは不完了体)でのバリエーションの選択が揺れるケースがある。アスペクトの中和現象(neutralization)は文脈の中でしか起こらないので、語彙論の観点からだけの研究では不十分である。アスペクトはテキスト言語学の重要な概念(前景(foreground)と後景(background))と密接に関係している。アスペクトを論じるうえで、テキスト言語学からのアプローチは重要である。一般的に、完了体は前景、不完了体は後景と結びついていると言われている。しかし、これでは、アスペクトの中和現象を説明することはできない。アスペクト研究をより完成度の高いものにするためには、アスペクトの中和現象を避けて通ることはできない。また、アスペクトの中和現象は言語学的に破格(solecism)形が関与している。この破格現象がアスペクト研究のさらなる発展の起爆剤になる可能性についても従来の研究では触れられていない。

2. 研究の目的

アスペクト研究は世界の様々な言語で行われている。アスペクト形式が文化化されている言語の代表がロシア語である。本研究は、ロシア語のアスペクト研究の空白の部分(アスペクト形式の中和現象)にスポットを当て、従来の研究では用いられていないテキスト言語学的な観点からの分析基準を提案し考察する。中和現象は文脈の影響を大いに受けるので、従来の語彙論からの考察では限界がある。本研究は、18世紀から今世紀までの文学作品を中心とする資料を徹底した統計分析を行い、虫食い状態だったロシア語のアスペクト研究を総合的に解明し、それと同時に、タイポロジー的観点から、ロシア語のアスペクトの中和現象が持つ一般言語学的な意義についても明らかにする。さらに、アスペクトと前景・後景の関係に関する通時的な考察を行い、従来のこの分野の断片的な研究を総合的に解明する。それと共に今回の研究成果をもとにアスペクト研究の国際的ネットワークの構築も目指す。

3. 研究の方法

研究方法としては、テキスト言語学的観点からの分析基準を用いて、共時的アプローチと通時的アプローチを行う。分析資料は、文学作品を用いる。分析対象は、副動詞の中和

現象と形動詞の中和現象である。これらの分析基準として、副動詞については、直接話法構文・発話表現との位置関係、状況変化、登場人物の発話回数、形動詞については、名詞の個別性、形動詞構文内の語数、形動詞構文の後続文の数、を提案し、これらから、ロシア語におけるアスペクトの中和現象の規則性を浮き彫りにする。またこの規則性が言語学上のどのような普遍的現象と相関するかを、副動詞および形動詞の意味的他動性に着眼して解明する。分析の過程で、アスペクトに関わる現象として、共時的には、動詞と不定詞の結合度のハイラーキー、さらに副動詞主体に関わる破格構文と意味的他動性の関係にもメスを入れる。通時的にはアスペクトと前景・後景の関係の時代による変化を明らかにする。

4. 研究成果

共時的アプローチとしてアスペクトの中和現象について分詞(副動詞と形動詞)を中心にして分析を行った。まず、副動詞の異形態と規範形との使い分けについて分析した。17世紀から19世紀にかけて、規範形と異形態が同じ意味で用いられた(例えば、完了体副動詞: Увидев / Увидя мать, Антон встал. 不完了体副動詞: Он слушал музыку, писав / пиша, письмо.)。両者を分析する上で、分析基準として、(1)文脈上の状況変化(状況変化のある文脈は前景になる)(2)直接発話構文・発話表現(直接発話構文・発話表現に位置的に近いところで用いられると前景になる)(3)意味的他動性を提案した。その結果、完了体副動詞についていえば、異形態は前景で用いられやすいが規範形はそうとは言えない。また、異形態では、意味的他動性が低い副動詞が主に用いられるが、規範形は意味的他動性の高い副動詞が用いられる。一方、不完了体副動詞についていえば、完了体副動詞のように統計的な傾向を明示することはできなかったが、不完了体副動詞の場合も異形態の方が規範形よりも前景に現れやすいという傾向はみられた。意味的他動性に関しては、不完了体副動詞は特徴的な傾向がみられなかった(論文5参照)。

上述の分析基準を用いて、ロシア語の二つの完了体副動詞(規範形と異形態)と日本語の二つ副動詞(テ形と連用形)の対照研究も行った。日本語の副動詞(テ形と連用形)は、同じ意味で用いられることがある。このような場合と上述のロシア語の完了体副動詞を比較した。その結果、前景に出やすいかどうかの点で、日本語の二つの副動詞は、ロシア語とは異なる傾向がみられた。つまり、ロシア語の規範形が前景で用いられにくいのに対し、ロシア語の規範形に対応する日本語の副動詞テ形は、前景で用いられやすい。また、意味的他動性に関して言えば、ロシア語規範形同様に他動性の高い語彙と関係している。一方、日本語の規範形ではない副動詞連用形

は、ロシア語副動詞とは異なり前景では用いられにくい、意味的他動性に関して言えば、ロシア語副動詞異形態と同じように他動性の低い語彙と関係している(論文5参照)。

次に、不完了体形動詞の二形(過去形と現在形)が同じ意味でいられる場合(例えば、*Антон смотрел на Наташу, читавшую / читающую книгу.*)での両者の使い分けについて、3基準(個別性(個別性が高いと前景になる)、形動詞構文内の語数(語数が多いと前景になる)、段落内の形動詞構文の後続文の数(後続文が多いと前景になる))を用いて分析した。ロシア語不完了体形動詞は過去形の方が現在形よりも前景で用いられやすいという傾向があることが判明した。さらに、副動詞の分析時に提案した意味的他動性との関係も調べた。その結果、規範的ではない現在形は意味的他動性が低い語彙が用いられやすく、規範的な過去形は意味的他動性が高い語彙が用いられていることが判明した(論文2、学会発表3参照)。

以上の共時的アプローチからのロシア語副動詞と形動詞の中和現象について明らかになったことをまとめると次のようになる。(1) 前景・後景の観点から言えば、完了体副動詞異形態、不完了体副動詞異形態と不完了体形動詞過去形が前景で用いられやすい。(2) 意味的他動性の観点から言えば、完了体副動詞異形態と不完了体形動詞現在形が意味的他動性の低い語彙と関係している。日本語副動詞の中和形の分析では、前景・後景に関してロシア語副動詞とは異なる結果となったが、意味的他動性に関しては、ロシア語副動詞の分析結果と同じ傾向が見られた。そこで、さらに、規範的ではない形式(破格形)と意味的他動性の低い現象との相関関係についてタイポロジーの視点から分析した。他動性の低い現象として、(1) 所有構文、(2) 再帰構文、(3) 受動文を取り上げて調べた。その結果、これらの現象に共通して破格形が他動性の低い語彙に集中していることが明らかになった(論文2参照)。この分析の過程で、ロシア語副動詞の行為主体に関わる不可分性にも意味的他動性の低い現象で破格形が現れることを発見した(論文1参照)。また、副動詞と形動詞の語彙分類を行う過程で、複合述語(動詞+不定詞)の動詞と不定詞の結合度についても分析を行った。従来の研究は複合述語の動詞の語彙分類に終始し、結合度に関して不十分な点がある。本研究は形に現れた客観的な分析基準として、「動詞と不定詞の間への他の語の挿入頻度」を提案して、19世の文学作品で用いられている複合動詞を分析した。その結果、動詞と不定詞のアスペクトの組み合わせが複合動詞の結合度に影響を与えていることを解明した(論文4参照)。

通時的アプローチとして動詞と分詞のアスペクトと前景の関係を総括的に分析した。分析基準は、共時的アプローチのところ提

案した「直接発話構文・発話表現(直接発話構文・発話表現に位置的に近いところで用いられると前景になる)」を用いた。ロシア文学黎明期の19世紀前半から現代の20世紀後半までの主要な文学作品で用いられている動詞と分詞(副動詞)と直接話法構文・会話表現(前景)の位置関係を統計的に調べた。19世紀の前半はプーシキン、レールモントフなどの作品にみられるようにロシア文学の出発点となった時代であり、19世紀後半はトルストイ、ドストエフスキーなど世界的に著名な作家たちが活躍し、ロシア文学の土台が形成された時期である。そして、20世紀前半はソ連邦成立に関連してゴーゴリ、ショーロホフなどの作家が登場し、20世紀後半はシュクシン、ラスプーチンなどの作家がソ連邦崩壊を迎える世相をあらわした時代であった。このような激動の19世と20世紀を代表する作家の作品に用いられている動詞と副動詞を綿密に分析した。従来のアスペクト研究では完了体は前景、不完了体は後景を形成することが一般的に指摘されているが、このことが動詞と分詞について、さらに時代とともにどのような様相を呈しているかについて総括的な研究はなされていない。その原因は、時代を通して一定の基準を使った分析を行っていないからである。本研究が提示した、直接話法構文・発話表現(前景)との位置関係という基準は、動詞と分詞のアスペクトが時代とともにどのように前景とかわったかを客観的に明示することができる。ここでいう位置関係とは、直接話法構文内、直接話法の直前直後、直接話法から1文以上離れているかを意味する。200年間を50年ごとに4区分し、各々の時代を代表する作家の作品(各時代4作品、合計16作品)を抽出した。抽出に当たっては、時代背景およびwebでの検索頻度の高さを考慮した。

分析結果は次のようになった。まず動詞について言えば、完了体動詞は19世紀前半では直接話法構文・発話表現から離れたところで主に用いられていたが、19世紀後半になると、離れたところでも近くでも均等に用いられている。さらに20世紀に入ると、前半後半関係なく、直接話法構文・発話表現の近くでもっぱら使われている。一方、不完了体動詞は19世紀前半から20世紀後半まで一貫して直接話法構文・発話表現から離れたところで主に用いられている。

次に、分詞(副動詞)について言えば、完了体副動詞は19世紀前半では直接話法構文・発話表現の近くで主に用いられていたが、19世紀後半になると、近くでも離れたところでも均等に用いられている。20世紀の前半になると、直接話法構文・発話表現の近くで主に用いられ、後半になると直接話法構文・発話表現から離れたところで多く用いられている。一方、不完了体副動詞は19世紀前半では直接話法構文・発話表現から離れたところで主に用いられていたが、19世紀後半から

20 世紀の後半まで一貫して直接話法構文・発話表現の近くで主に用いられている。

これらのことから以下のように結論付ける。

動詞についていえば、完了体動詞は時代とともに後景から前景で用いられやすくなり、不完了体動詞は時代に関係なく後景で常に用いられやすい。一方、分詞について言えば、完了体副動詞は時代とともに前景から後景で用いられやすくなり、不完了体副動詞は時代とともに後景から前景で用いられやすくなった。また、統計的な見地から補足的に言えば、動詞も分詞も完了体の方が不完了体よりも前景に対する関係に揺れが強くみられた。本研究の通時的分析結果は、従来のアスペクト研究が、断片的にしか指摘していなかった事柄を統一的に立証した（論文 3、学会発表 1、2、4 参照）。

研究結果はすべて国際学会で発表した。世界中のアスペクト研究者やスラブ語研究者と定期的に情報交換をしながら国際的なネットワークを構築した。その成果として 2015 年には京都で国際アスペクト会議「アスペクトの意味領域：体系の類型と通時的発展のプロセス」を主催した。18ヶ国から 110 名の参加者があった。今後も定期的に国際会議を主催する。

5 . 主な発表論文等

〔**雑誌論文**〕(計 5 件)

1. 北上光志 “Неотчуждаемость при деепричастном обороте (I)” Актуальные вопросы изучения русского языка как иностранного и проблемы преподавания на русском языке. Донской государственный технический университет. Ростов-на-Дону. 2017. 156-161. (査読有)

2. 北上光志 "Лингвистическое значение языковых колебаний в русском языке с точки зрения семантической переходности". IX Международный виртуальный форум - Батуми 2017: "Геокультурное пространство: смарт-технологии в образовании и социум". Batumi Shota Rustaveli State University, Georgia. 2017. 106-111. (査読有)

3. 北上光志 "Текст-лингвистический подход к анализу видов деепричастий в произведениях М.А. Шохолов". In Thomas R. Beyer (ed.) Cross-Cultural Studies Education and Science. Middlebury College. Washington, D.C. 2016. 5-16. (査読有)

4. 北上光志 "Степень сочетаемости словосочетания глагола с инфинитивом и вид инфинитива". АСПЕКТУАЛЬНАЯ СЕМАНТИЧЕСКАЯ ЗОНА: ТИПОЛОГИЯ СИСТЕМ И СЦЕНАРИИ

ДИАХРОНИЧЕСКОГО РАЗВИТИЯ. Университет Киото Сангё. Япония. 2015. 94-101. (査読有)

5. 北上光志 "Видовые синонимичные формы русских и японских деепричастий в художественном тексте". Die Welt der Slaven. Sammelbände- Сборники. Verlag Otto Sagner. München. 2015. 309-323. (査読有)

〔学会発表〕(計 4 件)

1. 北上光志 "Диахроническое исследование видов глагола и деепричастия с точки зрения лингвистики текста" VII международный педагогический форум. 2018.2.8. Самара (Russia). 2018.

2. 北上光志 "Анализ видов глагола и деепричастия в русских литературных текстах диахронической точки зрения". Тезисы докладов Международной научной конференции «Русский глагол» (к 50-летию выхода в свет книги А. В. Бондарко и Л. Л. Буланина). Санкт-Петербургский государственный университет, Институт лингвистических исследований Российской академии наук. 2017.11.16. Санкт-Петербург (Russia).

3. 北上光志 "Лингвистическое значение языковых колебаний в русском языке с точки зрения семантической переходности". IX Международный виртуальный форум - Батуми 2017: "Геокультурное пространство: смарт-технологии в образовании и социум". Batumi Shota Rustaveli State University, 2017.7.1. Batumi (Georgia).

4. 北上光志 "Диахронический анализ текстовых характеристик русских деепричастий". VIII Международного виртуального форума - Стамбул 2016: "Гуманитарные аспекты в геокультурном пространстве". 2016.10.4. Istanbul University, Istanbul (Turkey).

〔その他〕

ホームページ:

<http://www.cc.kyoto-su.ac.jp/~kitajo/index-j.html>

6 . 研究組織

研究代表者

北上 光志 (KITAJO, Mitsushi)
京都産業大学・外国語学部・教授
研究者番号: 40234257